

Title	研究と啓蒙の連結：一九四六年の新刊"CHINA"に寄せて
Sub Title	
Author	魚返, 善雄(Ogaeri, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.93(229)- 102(238)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究と啓蒙の連結

——一九四六年の新刊「CHINA」に寄せて——

魚 返 善 雄

日本の東洋學、ことにシナ學に、もし傳統というものがあるとなれば、それは多分にヨーロッパ的なものであつて、アメリカ的ではなかつたであらう。もちろん、その歴史の古さにおいて、その方法の綿密さにおいて、またその成果の多種多様さにおいて、たしかにヨーロッパのシナ學は堂々たる貫祿を示してきた。それにもまして世間の印象を深くしたのは、大家碩學といわれる人たちが次から次にヨーロッパに現れたことで、これはたしかに新世界に對する一つの威壓といつてもよかつた。

しかし第一次大戦以後の世界の東洋學界は徐々にその分布状態を改めた。ヨーロッパの學者でアメリカに招かれ、あるいは自分から渡つて行つて定住する人たちも多くなつた。一方、世界經濟の中心がロンドンからニューヨークへ移つたように、アメリカの富の力は、たとえば國會文庫のような形で、東洋學の資料の中心をこの若い大陸の一角に、また數箇所のうち建てたのである。コロンビア、ハーヴァード、エール、シカゴ、カリフォルニア等々の諸大學とその圖書館、美術館が過去二十年間に何をして來たかは今さら改まつ

て述べるまでもないであらう。

これらはしかし、主として物的あるいは形式的な方面の現象であつて、このほかに更に取扱いかたや精神の上の特色を見落すわけにはいかない。極めて概括的な言いかたではあるが、ヨーロッパのシナ學はいかにも綿密であり手堅くまとまつているものの、多少の例外的な人物を除いては、未だ大量統計による確率の算出とか、計畫的な連合研究による努力と效果の改善などに意を用いることは行われていなかつた。のみならず、ヨーロッパのシナ學者には、あたかも日本の漢學者にも似かよつた一種のデイレタテンリズムあるいは文人趣味があつて、それは善惡二様の結果を残しているのである。

「フランスのジエズイット派の研究に發端したシノロジイは、その後幾多の専門家を經て遂にマス・ペロ、ペリオ、カールグレン等、現代のシノロジストに於てほぼ完成の域に達したやうに考えられる。しかし西洋のシノロジイは完成の域に達したと共に行詰りの徴候を呈しつつあることも否定できない。デュルケイムの門に學

んだグラネのやうに、傳統的なシノロジに社會學的方法を導入して新しい氣運を開くに多少とも成功した例もあるが、その根本的シユタントプシクトは舊來のシノロジストのそれと異なるものではなかつた。すなはち中國文化を一應現代と切斷することに於ては、やはり同じシノロジストの範疇を出づるものでもなければ、或は發展性を有する新しいメトドロギイを確立し得るにも至らなかつたのである——これは岩村忍氏が「新傾向としてのアメリカの中國研究」(中國評論、昭和二年、十一、十二月號)の中に述べられた感想であるが、これによれば、ヨーロッパのシナ學者たちには更に一つの癖、すなわち研究對象としての中國文化を一應現代から切斷するという習慣があることになる。もちろん、この言葉は概括的印象を述べられたものであろうから、個別的に調べて行けばそうでない場合もあるうし、舊來のシノロジストの範疇からかなり進出して相當に發展性のある方法論を描き出した人もないとは言えないであらう。それにアメリカの東洋學者たちは、なるほど若くて精力的ではあるけれども、その書いた論文の貫祿に至つてはいかにもヨーロッパのシノロジストの門人といつた感じのする場合が稀ではなく、長所は多分に含まれているが完成はなお將來のことという印象を受ける場合が多いかと思う。

それはしかし、無理もないことである。アメリカ合衆國が一七八九年に正式に成立してからまだ百五十六年にしかならないし、アヘン戦争前後から今日までの百年あまりを通じて東洋研究が繼續されてきたものと假定しても、その歴史は浅いものである。初期の宣教師として渡來したブリッヂマンやウィリアムズあたりから數え

立てても、アメリカのシナ學關係者はヨーロッパの十分の一に達しないかも知れぬ。

第一次大戦までのアメリカの東洋學界は殆どヨーロッパ的な學風の下に指導されていた。指導者自身からして、たとえばヒルトやラウフアーのようにヨーロッパからの移住者が多かつた。この事實は、單に人的に見れば第二次大戦時代にまで續いている。レッシング、エリセーエフ、ウィットフォード、ガウエン、サモニー、フォン・ケルバー、ボルン、マイケル、メンヘン、ラ・ファルグ、リヤザノフズキー、レーデラー、ダントン等々、ヨーロッパ生れの學者は決して少なくない。

しかし、アメリカの市民がその素性に關係なく一種獨特の國民性を形づくつていようように、アメリカの東洋學もまた、指導者の出身國がどこであるにせよ、アメリカの風土にふさわしい一種の學風を作り出している。それは歴史的には同じ血統、同じ言語のヨーロッパの傳統を取入ると共に、地理的には一層近い東洋への切實な關心を抱き、更に心理的には新しい時代のチャンピオンとしての大膽さ、従つてまた普遍性へのあこがれを持つていよう。ここにおいて、岩村氏も指摘されたやうに、「舊來のヨーロッパのシノロジの行き方とは異なる、しかしその立場においても方法においても新しい中國研究の有力な傾向が新大陸アメリカに於て發生しつつあつた」。それはシノロジというよりは「チャイニーズ・スタディーズ」という名を多く用い、テーマとしては古代よりも近代が、特にその變遷の過程(Orbit)や對象相互の關係において一層多く取上げられる。問題を遠い昔の骨董棚の上に求めないで、なまの人間、し

かもなるべくならば集團の形においてとらえようとする。これは動的であり相動的であり、普遍的な立場であるといえよう。もちろん、それは一足飛びに得られたものではなくて、ヨーロッパ傳來のシノロジイが踏み臺になつていると見るべきであらう。しかし、それによつて手の届き得るところは、在來とは全く別の棚である。

この點、岩村忍氏の比喩は極めて穿つてゐる。氏は言う——「ヨーロッパのシノロジイがアメリカに於てチャイニーズ・スタディーズに變化しつゝあるのは單なる名稱の變化と考えることは出來ない。それは同時にアストロジイからアストロノミーへの變化えの如き實質と内容の變化を含むものと見做したい。アルケミーからケミストリーへの變化の如きものと考へたい。」——これももちろん概括論であらうから、あまり極端に區別するのはよくないであらうが、しかし、たしかに「ロジイ (logy)」と「イックス (ics)」のような關係の成立する場合が多いと思われる。もつとも、個人的魅力の點から言えば、ロジイ必ずしもイックスに劣るものではなく、また「ロジイ」の総合的な「まとまり」は、イックスの分析的な頼りなさを壓倒する傾きをもち、ことに「ロジイ」が近代的な抜け變りをおこなつた場合の清新さは一應「イックス」を見劣りさせるかの如くではあるが……。

それはともかく、アメリカの東洋學界にはたしかに若くて精力的な人たちが多いようである。私の手にし得た資料は一九四二年までのものであるが、それによつて見れば三十歳臺で早くも名を成した人々が少なくない。試みに幾人かを拾つてみよう——

「中國古代社會經濟史」「前漢時代の奴隸制」その他をあらわし

たフィールド博物館のウィルバー (Wilbur) 氏は今年日本流にかぞえて四十歳。例のウィットフォード氏もまだ五十二歳。パリーや北平で華語を研究して一九三八年以來ハーヴァードの教授となり、エリセーエフ氏五十九歳と共に「ハーヴァード大學アジア研究」雜誌」を編輯してゐるウエア (Ware) 氏はことし四十七歳。神戸商大や天理外語の講師をしたこともあるマイアミ大學の史學教授エツケル (Eckel) 氏は四十歳。「アメリカ圖書館中國關係書目」「同漢籍選目」「歷代史籍成立考」「康熙帝傳」「中國史料入門」その他を矢つぎ早に出したハーヴァード大學のガードナー (Gardner) 氏は四十八歳。「十九世紀・二十世紀の中國史」「張之洞の公生活」四十三歳。「中國の文明と文化」「乾隆朝の文字獄」などの著者で一九三五年以東コロンビア大學の教授をしてゐるグッドリッチ (Goodrich) 氏は五十四歳。「中國古代史研究」「中國の誕生」「歸納的華文學習法」などの著者で四一年以來生れ故郷のシカゴ大學の教授をしてゐるクリール (Creel) 氏は今年まだ四十三歳。浙江省の莫干山に生れ、同文書院に英語を教えたのち、ベルリン大學で學位をとつたエール大學のケネディ (Kennedy) 教授は華語華文のよき理解者であるが、今年四十七歳の働き盛り。シアトルのワシントン大學には四十一歳の史學者シュルタイス (Schulteis) 教授と四十三歳のテーラー (Taylor) 教授があり、後者は「太平洋國」「中國の再建」「米國の極東政策」などを著わしてゐる。「中國言語學」「北平方言音聲構造の分析」などを書いたハーヴァード大學のハートマン (Hartman) 氏はまだ三十三歳の若さ。「極東近世史」

「近代中國の國家主義と教育などの著者で、コロンビア大學の教授ピーク (Peake) 氏は、老大家のようであるが實はまだ四十八歳。」「中文參考書目解題」「西洋文化の中國への影響」などで知られているコーネル大學のビッグガースタフ (Biggestaff) 教授は今年四十二歳。」「唐の太宗の生涯と時代」その他の著者でカリフォルニア大學教授のビングガム (Bingham) 氏は四十七歳。」「日本の政治」「最近の極東政治」などを著わしたポモナ・カレッジのファース (Fairs) 教授は四十歳。デトロイトのウェイン大學で中國の歴史と文化を講ずるプリッツチャード (Pritchard) 教授は四十一歳。」「太平洋の人口土地問題」その他で知られたジョンズ・ホプキンス大學の地理學擔當者でドイツ生れのベルツァー (Pelzer) 氏は三十九歳。」「清朝史」「燕京歲時記」「中國の哲學と史學」などを著わしたペンシルヴェニア大學のボツデ (Botte) 教授も三十九歳。」「滿人の中國統治」「極東問題」などを著わし、かつて江西省瑞金に居住したホプキンス大學國際問題研究所のマイケル (Michael) 氏など、書いたものは老成しているが、實はまだ四十一歳。終戦後日本を訪れ「アジアの解決」その他で有名なラティモア (Lattimore) 氏もまだ四十八歳。プリンストン大學に極東問題を講ずるロウ (Rowe) 氏も四十三歳、等々々、どちらを見ても四十をすこし出たくらいの人たちが中心になつてゐる。これらの人たちは大抵三十歳前に Ph. D. を取り、各自の長所に向つて存分の努力を傾けてきたのであつて、恵まれた環境のせいとはいへ、その成績はまことに目ざましいものがある。日本では四十前後の人たちの多くは、衣食を支えるさえ容易ではなく、毎日を一種の低賃金労働である教員生活に消磨する

か、本一冊買えない待遇の研究所員として嘆息を續けるか、さもなくば米鹽の資を得んがために雜文を書いて賣り、學者として一番大切な時代をむざむざ葬り去つてゐるのであるまいか。

なおまた、われわれの注目させられるのは、近年アメリカの學界における中國人學者の活躍である。林語堂氏はひとまず除外するとして、音聲學者の趙元任氏は多年母校のコーネル大學やハーヴァード大學に關係し、またニール大學、ハワイ大學にも招かれてゐる。スタンフォード大學には廣東生れで四十二歳の陳某氏が華語と英語の教授をしており、ハワイ大學に中國哲學を講ずる四十七歳の陳氏もまた廣東嶺南大學からハーヴァードに進んだ人である。もう一人四十六歳の陳氏は福州の生れでコロンビア大學の出身、四〇年以來サザン・カリフォルニア大學の東洋學部長である。同じカリフォルニアのポモナ・カレッジにも廣東出身で四十九歳の陳教授が中國史學を持つており、陳姓の人は正に大發展である。その他、浙江生れの圖書館學者裘開明氏がハーヴァード燕京學社に關係し、同じく書誌學者で廣東生れの譚氏がハワイ大學東洋研究所の教授兼司書をやつてゐる。また、テキサス生れの二世で、これも書誌學専門の人にスウォン (Swann) 女史がある。この人は北平にも留學し、のちアメリカ各地の中國文庫に勤める傍ら、「漢代中國史」「班昭」「華文書目」などを著わしてゐる。アメリカの資力によつて東洋の書籍や美術品が集められたのち、その整理や保存に東洋人の協力が求められるのは當然であろう。しかし、そうしたいわば技術家的な面以外にも、本來のアメリカ人と同様の學科を擔當する東洋人のあつてよいことは言うまでもなく、現にそういう例がいくつ

も見出される。たとえばハワイ大學教授の李氏（廣東出身）は華語のほかには中國史學を教え、中にはアメリカ人に英語を教えている中國人さえあるのである。

こうした學者たちの國境を越えた接近と親愛の情は、やがて組織となり協力となり繼承となつて學界に貢献することになる。私はここに、その最も新しい例を一つ紹介したい。それは一九四六年の夏ごろ、カリフォルニア大學の出版部から出た「CHINA」という本である。この本は、戦争中からアメリカに在つた沖野亦男氏がその友人のマツキヴォイ氏を通じて入手されたもので、日本にはまだいづらもはいつていないかと思う。中國でもごく最近の新聞にその紹介が出たところを見ると、まだ一部の人しか見ていないであろう。

どんな本かと問われて一口に答えるならば、「數年前に石田幹之助氏の監修で生活社から出た陳衡哲女史編の Symposium — 譯名支那文化論叢 — を三倍かた充實させて新しい觀點から書卸したものだ」とでも言おうか。編輯者はシカゴ大學の極東史教授マクネア (MacNair) 氏であるが、内容は三十數人の専門家が連絡の上執筆している。そしてこの本は「國際聯合叢書」の一冊として、カリフォルニア大學史學教授カーナー (Kerner) 氏が總編輯者となり、前づけ二七頁、本文五七三頁という大冊になつて現れた。

この本の編輯がいかに良心的に、また忍耐をもつて行われたかは、打合わせのために交換した手紙の文章が書物の原稿よりも長くなつたという事實によつても證明される。この心がけは日本の出版者たちもお手本にしたがよいであろう。さて、この本は全巻を五部に分け、「背景」「歴史的・政治的發展」「哲學と宗教」「美術・文

學・教育」「經濟と再建」の大項目の下に章を分つこと三十四、終りに詳細を極めた「註」と「書目」及び「索引」があり、この書目だけでも優に一冊の好參考書となる分量と實質を備えている。中でも特色のあるのは歴史に關する部分で、考古學的記述に始まつて國民史詳説、國際關係に至る十二章二一七頁を占め、本文の三分の一以上に互つてゐる。歴史と銘打つた部分以外にも各項目ごとに歴史的記述がしてあるから、結局この本は大部分が歴史關係ということになる。

まず「序説」ともいふべき「背景」の部では、第一章を Han (韓?) Yu-shan 氏が「中國を形づくる要素」と題して概説を試みている。「中國が聯合國家の一員として民主的生活への戦いをしてゐるのは偶然の事ではなく、それはすでに古代の聖人によつて豫言されてゐる」とこの文の筆者はいふ。すなわち、孔子はその「天人相與」なる教義によつて、人間と自然との協力を説き、老子はその「無爲」の説によつて政治の要領を示したといふのである。孟子はまた一種特別の積極性をもち、「支配者が人民を人間扱いしない時には、人民はこれを敵に廻すがよい」と教えた。しかし、「これらはすべて人間と自然との調和を力説したものに外ならない。中國人は多年の經驗によつて、眞の勝利は基本的人權を尊重する道德的な者の側にあることを知つてゐる」といふ。

自然への歸一に次いで大切な中國の構成要素は「父母への孝心」である。これは「中國社會の支柱であり、中國人の一生を通じて最も重要な推進力である。」しかしながら、「大義親を滅す」という諺の示すとおり、親がまちがつてゐる場合には遠慮なく道德の側に

附いて反對してよい。たとい相手が親や君主でも無道の場合には奴隸的に屈從する義務は毛頭ないのである。

中國社會の第三の構成要素は科擧の制度であつた。二千年も續いたこの制度は中國人の生活をいろいろに制約した。更に第四の要素は、中國人の歴史に對する尊敬心である。黃帝以來歴史家の地位は政治上第一に重要なものの一つであつた。たとい皇帝といえども、歴史家の筆を曲げさせることはできない。一つの朝廷が倒れたのちに書かれるその朝代の歴史は、嚴密に封印された直接の資料によつてまとめられるのであるから、いわば「時代の審判」として權威を有するものである。「何人も歴史をのがれることはできない」(No one can escape history.) 最後にもう一つ、中國人の生活を制約する要素として「ことわざ」の使用がある、と韓氏はいう。「中國は諺の國である。」現實的で人情的なこの國の人たちは、華語によるあの簡潔明快な諺に満足を感じている。どんなに「無智」な苦力でも、民族數千年の經驗による智慧の結晶たる諺を豊富に身につけている、と筆者はいう。

以上、この在米中國人の列擧した事項は、一見まことに奇妙な取り合わせのようでもあるが、しかし、社會を制約する要素を具體的に指摘せよといわれた場合、誰しもこんなことになるのではあるまいか。「自然との調知」「親孝行」「官吏登庸試験」「歴史への畏敬」「眞理の簡明な表現(ことわざ)」——これが中國の社會を制約してきた原理であるということ、外國人としても鼻であしらわずにまじめに考えて見るべき提言であらうと思う。かつて中國の某氏が、中國文化の四大惡として宦官と八股文と纏足と阿片を擧げて、

日本がそれを輸入しなかつたのは賢明というようなことを述べておられたが、しかしこれらはそのままの形でこそ輸入されなくても、別の形では日本にも大に行われて來たのかも知れないのである。およそこの世の事物を一概に「卑近」とか「突飛」ということで蹴つてしまふのはよくない癖である。

さて、「背景」の第二條はペンシルヴァニア大學のダーク・ボツデ氏が「支配的觀念」という題で書いているが、氏は前にも紹介したように、ことしまだ三十九歳の少壯ながら、ハーヴァード燕京學社の研究員として多年研究を積み、ライデンで學位を取つた篤學の士である。ボツデ氏もまた中國人が超自然的なものよりも自然と人生に對して關心を持つてゐる事實をまず指摘し、祖先崇拜の意義を重要視し、道家の態度をも正當に評價している。氏によれば、道家的な自然觀はワーツワースのいわゆる "wise passive-ness" である。「陰と陽」の考えかたにしても、それは中國人が森羅萬象の背後にあるものを鬭争と混沌と觀じないで、調和と統一と觀じた結果生れ出たテオリイであるとする。そしてこの點中國人は、西洋人が専ら「善對惡」の二元論にとらわれて來たのちがつて、むしろ近代科學の精神と一致するものがあるときまでボツデ氏は言つてゐる。

道家が人と自然の關係を解決しようとしたのに對して、儒家は人と人の關係を解決しようとした。しかし中國人にはインド人の形而上的思索や西洋哲學の論理的探究よりも、人生目前の事柄の方が大事であつたので、いろいろの發明、たとえば製紙、印刷、陶磁、磁石などを始めたにもかかわらず、體系的な自然科學を發達させる

ことはなかつた。そのかわり人事方面においては歴代を通じて一種の道徳的假想が續けられ、その結果あの膨大な歴史文献が作り出された。人間の性は本來善であるとの假定は、いかに身分の低い人間でも聖人にまでなれるという豫想を抱かせ、それが中國人の樂天的な人生態度を形づくつた。人生は苦患であるとするインド流の考えかたとは又ちがつたものを中國人は持ち續けたのである。

向上の可能性が認められれば、従つて學問への尊敬が生れる。かくて古典はもとより、およそ人文的な探究は社會的重要性をもつようになつた。科擧などはその方便として生れた制度である。科擧の方法には缺陷があり、そこから生れた官僚にもまた弊害はあつたが、しかし中國のあの廣大さと、長い歴史のことを考えるならば、よくもあれだけにやれたもので、さればこそヴォルテールがあれば、どままでに傾倒したのであらう、とボッデ氏はいう。

學問の尊重は暴力の否定となるのが當然で、さればこそ中國では（實際はともかくとして理論的には）紛争の解決を妥協に求めるのである。戦争はずいぶん行われたけれども、西洋のように積極的に戦争を讚美したことはない。ただ、政治手段としての革命の場合には別である。——以上數段に互つて要約したのは、いずれもボッデ氏の觀察であるが、それは大體において前に出た韓氏の説と共通であるのは注目させられる。

次に、「背景」第三章はトロント大學の中國考古學教授ホワイト氏が、「最近の發掘による新しい知見」と題して書いており、ようやく觀念的概括論から具體的史實へと進んでいる。ホワイト氏は先ず殷墟の發掘から説き起して、甲骨文や青銅器の價值について述

べ、特に殷と周の文化の比較という點になると、最近二十年間の考古學界の業績にふれながら詳しく論じている。即ち周代の「中州」に當る地域からの種々の出土物についてである。私はその方面のことに暗いので批判はいたしかねるが、考古學的な事柄もこのように面白く書けばたしかに啓蒙的であると感心した。氏はまた墩煌をめぐるスタイン、ペリオ、ヘーデン、ル・コックらの遠征について述べ、次に筆を轉じて隴海鐵道沿線における、鐵道敷設にもなる發掘物（隋・唐のもの）について述べるなど、抜かりのない親切さである。さてはまた宋代磁器の見事さを説いて考古學と美術の連結をはかるなど、専門家から見れば極めて常識的のことばかりかも知れぬが、しかしいわゆる専門家でこれだけ筆の廻る人はそう多くないであらう。

これまではまだこの本のいわば序論である。本論というべき「歴史的・政治的發展」の部は第四章から始まる。まずヨーロッパ大學の中國史學教授グッドリッチ氏が、上古から殷の滅亡までのことを書いているが、氏は一九三五、六年天津におけるボーリングが華北の地質を知るのに役だつたことを述べ、次に周口店における「北京人類」の發見のことに及ぶと、「人類最古の標本はユーラシア大陸の東端において發見された。光は東方より！」と叫んでいる。「二本の足で歩き、火を使うことを知り、簡単な道具を作り、肉以外の物をもたべ、ハッキリした言語を話す」このシナントロップス・ペキネンジスはたしかに話題の種であつて、一兩年前に中國國立博物院の李濟博士が東京に見えたときにも、一部の標本の行くえについて非常な關心を持つておられるのを見た。

「北京人類」からホモ・サピエンス、氷河時代、アラスカへの移住、日本のアイヌ、華南および南洋の民族、氷河期以後黃河流域への歸還、定着、狩獵、牧畜、土器、農耕、織物、笛——そうした一連の事項は専門家の間にいろいろ意見のあることで、自信をもつて筆をとれる人はないのが當然でもあろう。しかしこの章の筆者はかなり明快に、現在の學問の知り得る限りのことを世間に傳えている。「改むるに憚るなかれ」というくらいであるから、日本の専門家もつと大膽に啓蒙の筆をとることが望ましい。さもないと専門外の人や一般世人は今日もなおラクーペリヤリヒトホーフエンの書物を読んで最新の知識のように思い込む危険がある。

新石器時代の末期に河南、山東、安徽、浙江あたりに農民として定住した人たちの文化——それはB・C・二千年ごろを限界として銅器や文字の時代に移るとされているが、この時代あたりから従來のいわゆる歴史との比較對照ができるので興味が深い。「夏」の時代がはたして有つたものとすれば、その時の姿はどんなであつたか、また商はB・C・一七五一あるいは一五二三年に始まつたといわれるが、その時代の想像圖がいろいろな學問の分野から綜合的に構成されたら面白いことである。殷墟の卜辭を文字學的に解くばかりが古代史研究の能事ではない。正直に告白するが、私なども東洋人の書いた上古史からは興味や啓示を見出すことが少いのに対して、西洋人のこうした書きものは、それが啓蒙的であるだけに良心的に見えて好感をおぼえ興味をそそられるものである。それほど必要もないのにやたらに各種の文献から引用をしたり、字の間に割註を入れることを學術的と考える専門家が多いとしたら困つた

ことである。

それはさておき、第五章は「周の偉大さ」と題して陳夢家(?)氏が執筆している。約八百年という中國最長のこの時代の歴史も、從來は傳統的な形式主義の記述に禍されてあまり興味の起らないのが普通であつたが、今後は文化的に、また思想的に潑刺とした記述が望ましい。その意味でこの陳氏の一篇などは珍しくのびのびとした好い解説である。しかも殷と周との關係を述べるに當つては歴史家としての手堅い考證が忘れられていないので安心して讀める。また、これはこの本の全體を通じて言えることであるが、前の章との續きぐあいが實にスムーズで、無用の重複や矛盾が殆どない。これは編輯者の周到な用意と努力のたまものでもあろう。

以下一々の章について紹介したのであるが紙面の關係上それはできないので、題名と筆者を掲げるに止める。第六章は「周の滅亡より唐の滅亡まで」(二二八B・C・—A・D・九〇六)と題し、シカゴ大學中國史學および語學助教授の鄧嗣禹氏が執筆。第七章は「唐の滅亡より清の滅亡まで」、筆者はワシントン大學教授のフランツ・マイケル氏。これで大體歷朝の通史を終つたわけであるが、更に特別の觀點から第八章としてカール・ウイットフォール氏が「中國の社會と外來政權」という題で得意の分析を加えている。また、第九、十章は「民國史」で、軍閥時代(一九一八—一九二八)、復興時代(一九二八—一九四六)の二つに分け、前の章は本書の編輯をしたマックネア氏自身が執筆し、後の章は孫中山の友人でその傳記作者のリネバーク(林白克)氏が執筆している。いずれも申し分のない顔ぶれである。

この本の中でも異彩を放つのは第十一章「社會革命」の一篇であらう。これはアグネス・スメドレー女史が執筆し、この篇だけは筆者が筆者だけに他の諸篇とは調子が大分ちがひ、時には全く反対の見解も表明されている。しかし、このように反対論をもこころよく許容するところに一種のよさがあるとも言える。第十二章は「國際關係」で、筆者は長らく税關に勤め「鹽鐵論」の譯その他で知られたエッスン・ゲール氏である。これまた適任者と言つてよからう。

以上十二章がこの本のうち直接歴史を取扱つた部分であつて、以下は第三部の「哲學と宗教」の項になる。ついでに概要を示せば、第十三章「中國思想」(胡適)、第十四章「民間信仰」(ホーダス氏)、第十五章「儒教」(シュライオク氏)、第十六章、新儒教(理學)(陳容傑?氏)、第十七章「道教」(ダブズ氏)、第十八章「佛教」(ハミルトン氏)、第十九章「キリスト教」(ラトゥレット氏)、第二十章「現代哲學界の動向」(陳氏)。

以下は第四部「美術・文學および教育」の項で、第二十一章「書道・詩・繪畫」(エースカフ女史)、第二十二章「美術」(蔣?氏)、第二十三章「建築」(マーフィ氏)、第二十四章「戯曲」(熊士一氏)、第二十五章「古來の文學」——その本質と限界(王氏)、第二十六章「今日の世界と中國文學」(パール・バック女史)、第二十七章「抗戦中の文藝と美術」(フェルプス氏)、第二十八章「アメリカ文學の一前線として」(ホバート女史)、第二十九章「近代教育」(ホークス・ポット氏)、第三十章「中國の科擧と西洋」(鄧嗣禹氏)。

以下は第五部「經濟と再建」の項で、第三十一章「經濟的發展」

「吳?氏」、第三十二章「農業」(裘開明氏)、第三十三章「國際貿易」(李氏)、第三十四章「諸外國と中國」(ロウ氏)。

これがこの本の全貌である。まさに一大冊の「中國文化大觀」であり、項目の立てかたといひ執筆者といひ、まずもつて現在における最高の水準と言つてさしつかえあるまい。遠慮のないことを言えば、現在の日本ではたとい資材その他を恵まれたとしてもこれだけのものは作れないであらう。それにしても氣の毒なのは、編輯者のマクネア氏がこの本の出版後わずか一年の一九四七年夏、急になくなられたことで、まことに哀悼の念にたえない。この本はもと「國際聯合叢書」(その中には「朝鮮篇」や「ポーランド篇」等々がある)の一冊として企畫されたもので、従つて多少政治的な要素が加わつてゐることも事實であらうが、しかし、それを割引いて考えても學界に對する一つの貴重な貢獻であつて、一九四六年度中國研究の一大收穫であつた。

慾をいえばいろいろ批評もできるであらうが、しかしさしあたりこれほどのものは作れないとなると、翻譯ということが考えられなければならぬ。さいわい、すでに前記の沖野氏やその友人の手によつて譯業が進められ、一方マツキヴォイ氏の好意によつて本國との交渉も進んでいるようで、更に喜ぶべきことは、先に石田幹之助氏監譯の「中國文化論叢」を出版した生活社書店がこの書の許可のありしだい全卷の譯文刊行という大きな仕事を引きうけることになつたと聞く。われわれは日本における中國研究——それは當然世界文化の研究につらなる——の推進のために、こうした良心的な書物、いわば専門家の頭腦の結晶が、一般人の手にも廣く渡つて行く

ことを待望する。

それにつけても、切に望みたいことは、學術における研究と啓蒙の連結である。學問を尊重するのはよいが、その遺風が妙に固まつてしまつて、讀んでかかされても何のことやら分らないような、いや、まるで讀もうにも讀めないような「難解」な「業績」ばかりが出版され、研究と啓蒙とが離ればなれ——と言ふより啓蒙のない状態が續くのはまことに困つたことである。啓蒙はもともと研究の豫備を兼ねるべきであつて、兩方を別々にするのはむだなことだ

高句麗の思出

藤田亮策

ある。眞にすぐれた啓蒙ならば、當然そのまま研究のコースに直結される。明らかな知性と、優しい思いやりと、それから分りよい言葉——特にこの最後のものが守りにくいように思われる。しかし、どんなに複雑な事柄でも、ある程度まで平易な言葉を用いて言いあはらせるはずである。高い理論を低い言葉で書きあらわす心がけを専門家はまず養いたい。それが出來たあとで始めて、この本のような、いや、これよりましな、啓蒙と研究とを直結した書物が生まれ、人々の文化的水準が高められるであらう。

高句麗の歴史が、滿洲史よりも朝鮮史に於いて重く取扱はれて來たのは、その後半の都城が朝鮮の平壤に置かれてあり、半島の北半を領有して百濟・新羅と密接の交渉のあつたのによることいふまでもない。國史に所謂三韓の一つとして専ら朝鮮との交渉に就て高句麗を記述して來たことも大きな原因である。東洋史の教科書でさへも、單獨に高句麗の起原發達を説いたものがなく、新羅・百濟と併せて三國を並べてある。従つて高句麗は朝鮮の一國とのみ

考へて、滿洲人の建てた最初の王國であり滿洲の大半を領した大國なることを忘れて居る人が尠くない。周書以下の支那の正史も常に新羅・百濟と並記し、宋史・元史に至つては、王氏高麗の條に高句麗の後裔であると麗々しく取上げて、いかにも朝鮮の古國であるかの如き感を與へて居る。東方蕃夷の國として軽く扱つたのであらうが、後世を謬る基はそこにあるといへる。渤海國を朝鮮史から除外して顧みないのも妙な話である。國史に關係の深い渤海の日本路はどうしても朝鮮の咸鏡道でなくてはならず、朝鮮の北境はその領域に入つて居た。民族的にも文化的にも、渤海が高句麗の後身